

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12342

研究課題名(和文) フランス・ルネサンス文学における芸術作品の解釈・鑑賞行為の表象

研究課題名(英文) Representation of the act of interpretation and appreciation of works of art in French Renaissance literature.

研究代表者

林 千宏 (Hayashi, Chihiro)

大阪大学・大学院人文学研究科(言語文化学専攻)・准教授

研究者番号：80549551

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は16世紀のフランス文学に表象される芸術作品の解釈・鑑賞行為のテーマを辿り、その変遷を明らかにすることである。中心的に取り組んだのは、ピエール・ド・ロンサールの『恋愛詩集』(1552-1553)、モーリス・セーヴの『デリー』(1544)、レミ・ベローの『牧歌』(1565)であるが、これらのテキストにおいて芸術の鑑賞・解釈行為の表象を検討した結果、それが16世紀フランス恋愛詩が獲得した思想的な重層性と密接に結びついており、さらにこの鑑賞・解釈行為の表象が書物としての構造にも拡張されていることを確認。こうした潮流が抒情詩の創作と読解に新たな可能性を拓いたことをみとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在のルネサンス・フランス詩研究においては、テキストの読解のために、当時の図像(絵画)、建築、印刷本などを参照し、まずは当時の著者、読者の双方にとってテキストがどのような姿を見せていたのかを再構築することが一般的となっている。この流れに倣さず本研究も、フランス国立図書館のサイトGALLICAで公開されている当時の印刷本を常に参照し、また同時代の様々な著者による書物を検討することによって、ルネサンス期の詩人たちが自らの作品集を出版する際には、どれほどの精密さでもって作品を構成したのかを明らかにしたものであり、これまでのルネサンス詩の読解に新たな可能性を提示したものと見える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to trace the themes of the acts of interpretation and appreciation of works of art represented in sixteenth-century French literature and to identify their evolution. The main focus of the study was Pierre de Ronsard's "Les Amours" (1552-1553), Maurice Sceve's "Delie" (1544), and Remy Belleau's "La Bergerie" (1565, 1572). As a result of examining the representation of the act of appreciation and interpretation of art in these texts, I confirmed that it is closely connected to the ideological stratification that 16th century French romantic poetry acquired, and that the representation of this act of appreciation and interpretation is extended to the structure of the printed book as well. Thus I found that these trends opened up new possibilities for the creation and reading of lyric poetry.

研究分野：16世紀フランス文学

キーワード：ルネサンス・フランス詩 プレイヤッド派 モーリス・セーヴ 印刷本 エンブレムブック

1. 研究開始当初の背景

本研究は、フランス・ルネサンス期文学に表象される芸術作品の解釈・鑑賞行為のテーマを辿り、その変遷を明らかにするものである。その背景には 15 世紀後半から 16 世紀にかけて、大量の古典テキストがフランスに流入し、これらテキストをいかに解釈するか、またどのような注釈を付すかを巡って当時の人文学者(ユマニスト)たちは様々な試行錯誤を重ねていたという事情がある。そして当時「再発見」された古典テキストの解釈は創作行為にも密接に結びついていた。つまり本研究は 16 世紀フランスにおける中心的テーマを扱うものであるが、その独自性としてなによりも読者の受容形態に注目し 16 世紀に出版された具体的な印刷本を通して考察するということが挙げられる。これは膨大な 16 世紀テキストの相当数がウェブ上に公開されるようになった現在こそ、一層取り組まれるべき主題ともいえる。こうした研究状況が開始当初の背景としてあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、創作と表裏一体の関係にある解釈・注釈が 16 世紀フランスにおいて、どのように変容していったかを見ると同時に、「解釈」をより広く捉え、当時の詩作品に描かれる芸術作品の鑑賞・解釈/注釈行為がどのように表象され、また彼らの創作活動とどのように結びついていたかを明らかにすることである。その際 16 世紀にヨーロッパにおいて大きく発展した印刷技術が詩の創作、解釈とも密接に結び付いていたことを示し、例えばエンブレム本などの挿絵入り印刷本、対訳本、さらに注釈書といったフォーマットが具体的にどのように作品創造に影響を与えたのかを明らかにすることも目的としている。

3. 研究の方法

本研究がまず注目したのは詩人たちがしばしば歌ったブラゾン(人物や事物の細部の描写を通じて対象を賛美・風刺する詩)、エクフラシス(美術工芸品などの描写)および、エンブレム(図像、銘、短詩からなる書物)という作品形態である。具体的には、研究対象として主に「プレイヤッド派」の詩人たち、なかでもロンサール、デュ・ベレー、ペローの作品を取り上げた。具体的にはロンサールの作品では『恋愛詩集』(1552, 1553)、デュ・ベレーでは『ローマの古跡』『夢』、レミ・ペローでは『牧歌』(1565)である。さらにこれらの作品を論ずる際には、プレイヤッド派に先だつ 16 世紀前半の詩人、モーリス・セーヴ『デリー』やクレマン・マロの『続クレマンの青春』なども取り上げることとなった。

例えばセーヴやマロのブラゾン、また『デリー』のエンブレムは極めて限定的な図像を巡っての描写およびその読解を内包する作品といえるが、エンブレムのように非言語の図像がテキストと同じ平面に挿入されることで、描写詩および図像は大きく変化していく。それは非言語の図像がその周囲のテキストと自由に結びつくことで、思いもよらない読解/解釈を生み出すからだ。これは詩作品が文字以外の要素とどのような関係を結びうるのか、さらに印刷技術によって生まれる著者と読者の距離がいかなる解釈を生むのかを探る試みでもあった。デュ・ベレー、ペローらがこうした問題に意識的であったことは、自らの作品の印刷形態に十分な配慮を凝らしていたところからも見てとれる。このような理由から、彼らの作品を当時の印刷本としての形態から切り離すことなく、分析検討を行った。

4. 研究成果

研究成果を分類するなら、主にモーリス・セーヴを扱ったもの、ピエール・ド・ロンサールを扱ったもの、そしてレミ・ベローを扱ったものがある。当初の計画ではここにクレマン・マロやジョアキム・デュ・ベレーも加わるはずであったが、今回はそれぞれをメインの分析対象として扱うことはできなかった。とはいえ、いくつかの論文や発表ではマロやデュ・ベレーに触れるものもあり、部分的には達成できている。それぞれの研究成果が「ソネ」「エンブレム（図像）」といったキーワードによって問題を共有しており、一つ一つの研究成果は互いに緩やかに結びついている。

まず、「エンブレムと鏡 セーヴ、ロンサール、ベローにおける鏡のモチーフ」は、本課題の中心をなす3人の詩人の作品、すなわちロンサール『恋愛詩集』、セーヴ『デリー』そしてベロー『牧歌』を取り上げた成果である。これらの作品においては、「鏡」のモチーフが詩句の構造や展開、図像、印刷本としての体裁など至るところに見られることを指摘。鏡、エンブレムは同時代のガラスの加工技術そして活版印刷術の開発・発展とともに普及していったものだが、詩人たちはこれらの技術によって可能になったこと、すなわちより鮮明に再現される自己そして世界のイメージやヒエログリフを源泉とするエンブレムの著者と読者の地理的・時間的隔たりに触発され、それを詩作に反映させている。ここで特格的に用いられているのが恋愛における視線や接吻のモチーフである。鏡のモチーフと結びつく接吻のモチーフは恋愛の主題に明確な一つのイメージを与えつつも、その鏡面構造は印刷の過程における活字と紙の構造までもも想起させずにはおかず、詩作にも結びつく。こうして同時代の作品そして古典を意識しつつ、鏡とエンブレムという同じモチーフを繰り返し登場させ、恋愛と詩作を有機的に結び付け歌いながらも、『デリー』、『恋愛詩集』そして『牧歌』には明確にそれぞれの特徴が表れていることを明らかにした。この論文で触れた3人の詩人の内の一人、レミ・ベローについて研究を行ったのが以下の論文および発表である。

まず「レミ・ベローにおける牧歌の詩学—『牧歌』(1565)を中心に—」では、作品の構造となっているジョワンヴィルの城館と、その中を主人公が美術工芸品を鑑賞しながら逍遙する展開が作品に時間的な重層性をもたらしていることを指摘、さらにこの作品の特徴である韻文と散文からなる構成が、当時の印刷本の特徴を取り入れつつ注釈付き詩集に接近することで、牧歌という作品ジャンルの持つ総合性を最大限に利用し鑑賞と解釈が直接的に創作に結びつく様子を描いた書物であることを具体的に明らかにした（この論文を翻訳、改稿してアンヌ＝パスカル・プエイ＝ムヌ教授（ソルボンヌ大学）および岩下綾准教授（慶應義塾大学）の共催する研究会で発表した）。

同じベローを取り上げて論じたのが「レミ・ベローの2つの牧歌—『牧歌』(La Bergerie) 1656年版および1572年版を通して—」であり、ここではベローが発表した『牧歌』第一版と第二版を比較検討することで作者の意図を探った。本論で注目したのは主人公が眺める絵画中に現れる牧人の名である。この名の変更を作品の改訂の過程と重ね合わせて丁寧に追うことで、作品そのものの性質が変化してきていることを指摘。すなわち、『牧歌』の第二版は、庇護者たるギーズ家の賛歌から、友人である詩人デュ・ベレーの死を悼む哀歌へと変化してきているということである。この二つの版の相違について、そこで表象されるジョワンヴィルの城館に注目し、さらに考察を行った成果が、プエイ＝ムヌ教授および岩下准教授の共催による国際学会での発表「レミ・ベロー『牧歌』における建築エクフラシス（L'ekphrasis architecturale dans *La Bergerie* de Remy Belleau）」（国際学会「フランス16世紀文学における建築エクフラシス」）である。第一版では精緻な建築エクフラシスを何より特徴としていたこの作品が、改訂・大幅に増補されることによって、その構造の精緻さを失う。

それに伴って舞台設定も城館内から庭園へと移り、美術工芸品の鑑賞の表象から、友人同士の詩作品の鑑賞へと展開も変化していき、その結果第二版が友人の詩人たちとのコンピレーション作品としての側面を強めていることを指摘した(Classique Garnier 社から刊行予定)。

もう一人の詩人セーヴについてまず取り上げたのは、「モーリス・セーヴ『デリー』(1544)における塔の表象」である。この論文で明らかにしたのは、エンブレム(図像)として提示される塔(バベルの塔)が、諸言語とそれが指し示すものとの関係というルネサンス期にアクチュアルであった問題と密接に結び付いていることを示し、それが恋愛詩において使われることで、数多くの解釈を呼び込む点を指摘。一方で当時の読者は、エンブレム(図像)が源泉とする古代ヒエログリフが既に当時解読不能であったにも関わらず、先端の技術たる印刷術によって再び新しい形で広まり、蘇る(読まれる)のを目の当たりにしている。つまりこの塔のエンブレム(図像)は人間の創作活動のはかなさと、また新たな蘇り(解読)をも象徴しうる。これは『デリー』において、セーヴがバベルの塔の主題をエンブレムという形式において新たな表意文字として復活させ、また恋愛というおよそバベルの塔とは結び付きがたい主題のもとであえて取り上げていることから明らかであることを指摘した。

セーヴの図像については、他に「グロテスク」の詩集 - セーヴ『デリー』(1544)における縁飾りについて、および「図像」の変遷:『カンツォニエーレ』から『愛のエンブレム』へ」でも検討。前者では『デリー』の図像を縁取る装飾を中心に考察し、その縁飾りのフロンテヌブロー宮殿のフランソワ一世のギャラリーの額縁との親近性やフランドルの版画の様式との類似点を再検討し、同時に図像との関係も考察。これを「異種の事物の混交」の美学を様々なレベルで取り入れたセーヴ流の奇想であると考え、印刷本であるからこそ可能なことであったと考えた。そしてセーヴはあえていわゆる「グロテスク」を排するホラティウスの教えに背くことで、印刷本の時代の新しい詩集の在り方を示したのではと結論づけた。

一方、先に挙げた塔以外の図像に関して、すでにマリオ・プラーツ『バロックのイメージ世界』でも指摘されている『デリー』の図像のヨーロッパに与えた影響(例えばダニエル・ヘインシウス『愛のエンブレム』)を再確認した上で、とりわけフェニックス(不死鳥)に関して考察をしたのが後者である。ここでは『デリー』に加えて、詩としてはペトラルカ『カンツォニエーレ』、マロ『続クレマンの青春』、デュ・ベレー『夢』を取り上げ、さらに図像としてはクロード・パラダンの『英雄的ドゥヴィーズ集』、フランドルの詩人ヤン・ファン・デル・ヌートの『俗人の劇場』を取り上げて比較検討をした。

その結果、これらの作品中でエンブレムはおよそ3通りの用いられ方をしていることを指摘。一つ目は教義の図像化としてのエンブレム、二つ目は解釈されるべき謎としてのエンブレムである。一つ目は基本的に中世以来のドゥヴィーズ(インプレーサ)の用いられ方であり、ある図像が一つの教義や教訓を表す記号となりうるという発想からなりたっている。一方で二つ目は、一つ目の用いられ方が発展した形としてある。教義、教訓の隠された謎解き的一种として図像が提示されるが、その謎は解かれることが想定されていたとしても明らかになることはない。したがって読者は自分なりに教義を組み立てるしかない。ここにさらにもう一つ、三つ目のエンブレムの用いられ方として、『俗人の劇場』に見られる、すでにあったテキストに付された挿絵を挙げた。ここでの挿絵はテキストを簡略化して視覚化するという一つの解釈が行われてはいるが、それはむしろ読者の目を楽しませ、記憶に定着しやすくするように用いられているのであり、いわば教育的使用といえる。

このように16世紀、17世紀以降も流行したエンブレムの用いられ方は様々である。なかでも『デリー』が図像とテキストの直接的な関連性を低めることで、より多くの解釈を読者

が導きだすように構成していることが見て取れ、同時代の多くのエンブレム本の中でもその特殊性が際立っていることを指摘した。

ロンサールについてはとりわけ「エピグラムからソネへーロンサール『恋愛詩集』(1552)を中心に」において具体的に考察をしている。注目したのは冒頭に付されたロンサールとカッサンドルの肖像画、またソネという詩形の意味、そして1552年に出版された印刷本のページ構成である。その際に参照したのが『デリー』であるが、それはロンサールの『恋愛詩集』が『デリー』のページ内の構造の堅固さを受け継いでいるように思われ、さらに『デリー』の10行詩、セーヴの言うエピグラムがロンサールのソネという形式を準備しているように思われたためである。もちろんロンサールは図像をカッサンドルとロンサールの肖像、あるいは帯状装飾と飾り文字にのみに限定しており、一方で見開きに4篇のソネを完結させるという形式にはデュ・ベレーの『オリヴ』という先例もあるが、ソネに付されたローマ数字を排することで、ページ内での視線の動きをより自由なものとし、さらなる解釈の多様性を作品中に持ち込んでいる。こうしてフランスで初期に自らの『カンツォニエーレ』たる恋愛抒情詩集の創作に着手した詩人(セーヴとロンサール)の二人ともに、エンブレム本を意識していたことを指摘した。

このように本研究では、ペロー、セーヴ、ロンサールという三人の詩人を中心に据え考察したが、彼らの作品における美術工芸品、そしてその鑑賞行為の表象はひとまず詩人の創作行為とさらに靈感を暗示するものとして描かれつつも、テキストのみで完結するのではなく、現実の美術工芸品や建築物などとも密接にかかわり、また印刷本の図像や活字、ページ構成などとも有機的に結びついて、現実の読者の読解の可能性の多様性をも表象していることが明らかとなった。これは活版印刷術による印刷本が急速に普及した時代にあって、このメディアの可能性を深く追求した結果であり、そうした追求は16世紀前半のセーヴらから既に見られ、その後の詩人たちにも確実に受け継がれ、さらにそれぞれの詩人ごとに独自の展開がなされていることが確認できた。

さらにこれらの研究について、海外の研究者とも交流を図り、2019年にはスイスの学術出版社Drozのディレクター(当時)であり16世紀文学および歴史の研究者Max Engammare氏を招聘。Engammare氏の、宗教およびその図像に関する広範な知識でもって助言を求め、本課題において明らかとなった美術工芸品の鑑賞行為の表象の重要性について、たとえばプロテスタントの詩人テオドール・ド・ペーズなどの例をも指摘してもらうこととなった。この件については本研究代表者の関わる国際誌『ロンサール研究XXXIII(Revue des Amis de Ronsard)』に「図像(アイコン)から『図像集(イコネス)』へ ロンサール、ペーズにおける文学的肖像と描かれた肖像(De l'icône aux icônes Le portrait littéraire et le portrait peint chez Ronsard et Bèze)」として寄稿いただいた。

また同じくスイス、ヌーシャテル大学の研究者Loris Petris氏も2022年に招聘し、詩と芸術作品の関わりについて講演を行っていただき、より大きな視点からの意見をいただいた。この講演については同じく『ロンサール研究XXXVI』に「ルネサンスにおける詩と芸術 ライバル/対抗関係の間で(La poésie et les arts à la Renaissance entre émulation et concurrence)」として寄稿いただいた。両氏の講演にはいずれも多くの聴衆があり、本課題研究のアウトリーチという点においても、意義深いものであったということを強調しておきたい。

今後はこの印刷本というメディアに一層注目し、文字テキストとの関わりをより精緻に分析する必要があると感じている。本課題を遂行するにあたって浮かび上がってきたこの課題についての研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 2021 |
| 2. 論文標題 「図像」の変遷：『カンツォニエーレ』から『愛のエンブレム』へ | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト | 6. 最初と最後の頁 13～24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88389 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 「「グロテスク」の詩集 - セーヴ『デリー』（1544）における縁飾りについて」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 表象と文化 XVIII | 6. 最初と最後の頁 13-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/85072 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 「ロンサール『恋愛詩集』における視覚について」 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 ロンサール研究 | 6. 最初と最後の頁 79-94 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 エビグラムからソネへ：ロンサール『恋愛詩集』（1552）を中心に | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 表象と文化 XVII | 6. 最初と最後の頁 23-34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/77073 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 2018 |
| 2. 論文標題 モーリス・セーヴ『デリー』（1544）における塔の表象 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト | 6. 最初と最後の頁 19～30 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/72693 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 2017 |
| 2. 論文標題 エンブレムと鏡：セーヴ、ロンサール、ペローにおける鏡のモチーフ | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト | 6. 最初と最後の頁 9～20 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/69911 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 巻 31 |
| 2. 論文標題 レミ・ペローにおける牧歌の詩学 『牧歌』（1565）を中心に | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 ロンサール研究 | 6. 最初と最後の頁 77-98 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 林 千宏 |
| 2. 発表標題 レミ・ペロー『牧歌』（1565）における時間 |
| 3. 学会等名 岩下綾・アンヌ＝パスカル・プエ＝ムヌ主催日仏交流研究会（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 林 千宏 |
| 2. 発表標題 フランス・ルネサンス期における「作品集」の編纂 レミ・ペローの『牧歌』1565年版および1572年版を通して |
| 3. 学会等名 大阪大学言語文化学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 林 千宏 |
| 2. 発表標題 ロンサール『恋愛詩集』（1552）における視覚について |
| 3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 林 千宏 |
| 2. 発表標題 レミ・ペロー『牧歌』における建築エクフラシス |
| 3. 学会等名 岩下綾・アンヌ＝パスカル・プエ＝ムヌ主催国際学会「16世紀フランス文学における建築エクフラシス」（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 林 千宏 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 朝日出版社 | 5. 総ページ数 14 |
| 3. 書名 コレスポンダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論集 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

| | |
|--|--------------------|
| 国際研究集会 ロリス・ペトリス先生講演会 | 開催年 2022年～2022年 |
| 国際研究集会 マックス・アンガマル先生講演会「図像（アイコン）から『図像集』（イコネス）へ ンサー、ベースにおける文学的肖像と描かれた肖像」 | 開催年 2019年～2019年 |

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|